

E. フロムによる自由の実存論的解釈

Existential Interpretation of the Freedom by Erich Fromm

佐藤友梨

Yuri SATO

はじめに

エーリッヒ・フロム¹はその著書『自由であるということ』²の中で旧約聖書における神・人・歴史観を再解釈し、人間存在における自由という概念を提起している。

フロムの代表作は1941年に刊行された『自由からの逃走』であり一貫して自由ということが主題となっている。第一次世界大戦後古い君主政治から新しいデモクラシーに代わって、人々は自由を手に入れたはずなのに、またしても新しい強力な権力〈ファシズム〉に服従し始めたのは何故かという問題意識がフロムの著作には一貫して流れている。フロムは他にも様々な著作を刊行しているが、それらは基本的に『自由からの逃走』で示された議論を展開したものとして理解できる³。つまり、1966年に刊行された『自由であるということ』におけるフロムの議論は、『自由からの逃走』で示された議論を、旧約聖書というユダヤ教の書物から再解釈することによって発展または変容させたものであると考えられる。この意味において、『自由であるということ』を旧約の妥当な解釈を行った著作であるか否かを議論することは有意義ではない。しかし、フロムの議論は社会心理学的な面が目立ちがちであるが、フロムは宗教と精神分析に独自の接近法で考察を行っているため、フロムの自由の議論においては宗教的側面に注目することが可能で

¹ E. Fromm (1900-1980) フロムはどちらかと言えば、哲学や精神分析の本流からは離れ、学者というよりも大衆作家であると考えられがちである。フロムの学問的色彩から分類するのであれば、1930-1938までフランクフルトの社会研究所に属したことから、ホルクハイマーやアドルノ、マルクーゼらと並んで、フランクフルト学派や批判理論の論者の一人として名を挙げられることもある。また、マルクスとフロイトの発見を継承し融合した社会的心理学者として、渡米後ホーナイやサリバンなどとともに新フロイト派の一人と称せられることもある。以上のことから、フロムが大衆に分かりやすい著作を著しつつ、社会学と精神分析の分野に跨って、偉大な仕事を成し遂げた人物であると解せられる。フロムを直接的にユダヤ教思想と関連付けるには、彼がラビの家系の家庭でユダヤ教的な雰囲気の中で育ったという幼少期の環境を持ち出さなくてはならない。本稿は、フロムの自由の議論が神観念と関連していることから、宗教的な事柄に着目しているが、特にフロムの幼少期の体験に関連付けることはしない。なぜなら、フロムはユダヤ教の伝統的思想を継承していることは明らかであるが、一貫して宗教的次元を社会心理学といった学術的な手法によって述べている。そのため、ただ幼少期の体験と結びつけるだけの考察は不適切であると考えられる。Cf. F.W. グラフ他編『ティリッヒとフランクフルト学派：亡命・神学・政治』法政大学出版局，2014。

² E. Fromm, *You shall be as gods: a radical interpretation of the Old Testament and its tradition*, New York: H.Holt,1991.(Reprint. Originally published: New York: Holt, Rinehart and Winston, 1966) 邦訳：飯坂良明『自由であるということ』河出書房新社，2010。（旧邦題：『ユダヤ教の人間観』『神・人間・歴史：ヒューマニズムの再発見』）

³ フロム自身は「本書（『正気の社会』*The sane society*, London: Routledge & Kegan Paul, 1956.）は……『自由からの逃走』の続編である」と語っており、その後のフロムの著作は、ほとんどが『自由からの逃走』の補填もしくは書き換えであると考えられる。Cf. E. フロム『正気の社会』加藤正明/佐藤隆夫訳，社会思想社，1958，5頁

ある。以上のことから、本稿ではフロムの社会学的及び精神分析的側面を認めつつも、実存論的次元を明らかとするために、人間の精神の深部に迫る宗教的側面に特に注目する⁴。

1. 問題提起

本論の趣旨は、フロムの自由の議論が実存の問題へと展開する可能性を内包していることを示すことにある。社会心理学者としてのフロムの議論は、どこまで実存論的に解釈することが可能であるのか。以上のことを踏まえて、問題の所在を明らかにしたい。

(1) 自由—フロムの議論—

フロムはまず、旧約聖書を物語として捉えている。

旧約は、小さな原始民族が唯一の神の存在と偶像の非存在を強調する霊的指導者を持ち、名前のない神や、万人の窮極的一致、そして各個人の完全な自由を信ずる一つの宗教を発展させた物語である⁵。

旧約聖書はまさに革命的な書物である。その中心的主題は、血と地につながれた近親相姦的紐帯から人間を解放し、また偶像崇拜、奴隷制、権力などからも人間を解放して、個人と民族とそして人類全体に自由をえさせることにある⁶。

事実、旧約はヘブライ人によって紀元前10世頃から口頭伝承され、記され、編纂され、さらに編纂し直されて纏められた書物である。この間、ヘブライ人はメソポタミアとエジプトという大国に挟まれた小国として、強国の脅威に曝され、捕囚を経験し、属国となるという苦渋の歴史を歩む⁷。そのようなユダヤ人らが、どのようにして各人の完全なる自由を信ずる宗教を育むことができたのか。それは、逆説的ではあるがユダヤ人が国土を失い、常に強国の権力に従属しなければならなかったことが要因であるとフロムは著する⁸。なぜなら、権力による苦しみを経たからこそ、ユダヤ人は旧約の物語にあらゆる権力や束縛からの解放という主題を見出し、引用し、朗誦し、ときには本来の意味とはかけ離れた強引な解釈を行ってユダヤ教の伝統的思想を発展させてきたからである⁹。このようにして培われた権力や束縛からの自由という概念は、旧約の時代のみに限らず通用する精神である。なぜなら、あらゆる権力や束縛からの解放という共通の精神的基盤は、あらゆる民族や世代の中に存在するからである¹⁰。

⁴ 以下の論文もまたフロムの『自由であるということ』に注目しているが聖書神学に重点を置いた議論展開になっている。滝澤武人「旧約聖書における自由—エーリッヒ・フロムを中心として」『桃山学院大学キリスト教論集 (50)』247-271, 2015.

⁵ 邦訳は飯坂良明訳を参照しつつ解釈によって適宜変更している。You Shall Be As Gods, p.9 (『自由であるということ』14頁)

⁶ You Shall Be As Gods, p.6-7 (『自由であるということ』11頁)

⁷ イスラエルの歴史に関してはフロムの歴史観を主に参照しているが、以下の文献も参考とする。

H. リングレン『イスラエル宗教史』荒井章三訳, 教文館, 1976.

M. ノート『イスラエル史』樋口進訳, 日本基督教団出版局, 1983.

M. メッガー『古代イスラエル史』山我哲雄訳, 新地書房, 1983.

⁸ Cf. 「この世的な見方からすればユダヤ人の悲劇とも思われること、つまりその国土と国家を失ったということも、ヒューマニズムの視点からすれば、彼らの最大の祝福であった。」You Shall Be As Gods, p.15 (『自由であるということ』22頁)

⁹ You Shall Be As Gods, p.4-6 (『自由であるということ』8-10頁)

以上のような前提において、フロムは徹底したヒューマニズムにおける解釈で以て〈自由であるということ〉を議論していく。徹底したヒューマニズムとは、人間の目標を独立においてみている。フロムは独立とは能力であると述べているため、独立する能力を人間は誰しも潜在的に有しているものであることを前提とする。しかし、人間は独立する能力を行使し発達させることを拒み〈自由であるということ〉を放棄する¹¹。フロムの問題意識は、人間は何故権力や束縛に従属することに満足し、自己の独立、つまり実存の確立を放棄するのか、という所にある。従って、フロムの自由の議論には実存論的次元があると言うことができる。

(2) 研究史

次に、研究史における問題の所在を明らかにしていきたい。フロムは社会心理学者であるが、パーソナリティ分析の社会学者としての側面に最も影響を与えた人物こそカール・マルクスである。フロムは新フロイト派という形容が示すようにフロイトをマルクスの修正したという想定のもとに整理されることが一般的である¹²。しかし、フロムの思想の社会学的側面及び精神分析的側面に重点が置かれ、宗教的側面がやや軽視されがちである。フロムは精神分析家でもあるが、自ら宗教家として立っているわけではなく、フロイトのように宗教に関心を持つことは解消されない感情的葛藤の兆候だと断じる立場でもない。神や宗教的シンボルを直解的に理解することを否定しつつも、神と表現しうする何がしかの価値が人間精神に生じることは認めている。よって、本稿ではフロムの社会学的及び精神分析的側面を認めつつも、より人間精神の深部に迫る宗教的側面に注目する。

(3) 方法論

フロムの自由の議論における実存論的次元を明らかにするには、どのような方法を取るのが相応しいか。フロムは旧約を「神の言葉」として見ていないが、「幾世代にもわたって生と自由のために戦った民族の精神を表明するもの」¹³として捉えている。また、旧約に関する歴史文学的批評は重要なものとして扱われているが、フロムの旧約への接近方法として重点が置かれている訳でも不可欠なものでもない¹⁴。あくまでも必要な箇所は参照するという姿勢である。そのため、フロムの旧約理解がどの程度、歴史文学批評的に妥当なものであるかという考察は本稿では行わない。また、フロムは徹底して人間精神における神を考察し、神自身を考察することはせず、神でも人間でも全て観念という側面から議論を展開している。そのため、フロムの言う〈自由であるということ〉の実存論的次元を明らかにするためには、フロムの観念論を中心に据え、そこからフロムの自由の議論を考察していくことが必要となる。

¹⁰ Cf. *You Shall Be As Gods*, p.6-7 (『自由であるということ』11頁) フロムは共通の経験的基盤 (some experiential substratum common) や共通の基盤 (a common ground) があれば同様の象徴や観念で以って表現することは妥当であると述べている。即ち、人間経験における共通の精神的基盤があれば同一の言葉や観念で表現することは妥当であるという考えである。このため、フロムは異なる経験であっても共通の基盤を持っていれば自由という同一の概念で表現することは妥当であると考えていると言える。(You Shall Be As Gods, p.19『自由であるということ』25頁)

¹¹ Cf. *You Shall Be As Gods*, p.75-77 (『自由であるということ』101-103頁)

¹² D. バーストン『フロムの遺産』佐野哲郎 / 佐野五郎訳, 紀伊国屋書店, 1996.

(Burston, Daniel, *The legacy of Erich Fromm*, Cambridge:Harvard University Press, 1991.)

¹³ *You Shall Be As Gods*, p.7 (『自由であるということ』12頁)

¹⁴ Cf. *You Shall Be As Gods*, p.7-8 (『自由であるということ』12頁)

2. 自由—reality を中心に—

フロムの自由の議論を理解する上で、「神」という言葉が重要となってくる。ここで言う神とは、フロムが分析対象とする人間精神と無関係な存在ではありえない。「神」という言葉は、何らかの人間経験を観念として表現した場合において使用されるからである。ここでは実在性 (reality) に注目し、実存論的次元を明らかにしていく。

(1) 神観念

フロムの観念の捉え方は至って単純である¹⁵。経験と、経験に伴う実在性 (reality) とがあり、経験を表現するものとして観念があるという構造である¹⁶。

もしも観念が疎外されたら、つまり、観念の基礎にある経験から切り離されたら、それは現実性 (reality) を失って人間の知的な工作物となってしまう¹⁷。

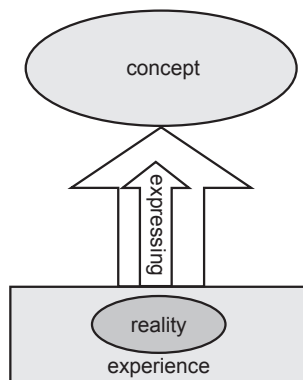


図 1

フロムが認める観念とは、単なる経験と結びついた観念ではなく、実在性 (reality) を伴った経験から疎外されていない観念である¹⁸。実在性 (reality) を伴わない観念は、イデオロギー化した観念であり生きた人間精神の表現ではない。つまり、神観念も実在性 (reality) を伴うか否かにより観念の性質が全く異なっていることをフロムは主張する。フロムの観念における実在性 (reality) の役割は大きい。観念は経験を表現したものである一方で実在性 (reality) を指すものであるとも言えるからである。フロムは観念が指すものは人間経験であるとしているが、それ以上に人間経験における実在性 (reality) に注目していたために、「神観念は、人間経験のいかなる実在性 (reality) を指すものであろうか」¹⁹という観念は実在性 (reality) を表現したものと捉えられる記述がある。で

は、神についての観念とはどのような実在性 (reality) を表現しているのでしょうか。

「神」は、それ自身実在 (reality) というよりも、ヒューマニズムに含まれた最高の価値をいろいろと異なった詩的表現で言い表した場合に言われることである²⁰。

この場合の「神」とは、神という観念、もしくは神という語のどちらかを指しているのか。観念が内在

¹⁵ フロムの観念の捉え方には一見知識の循環がない。一方向的な経験⇒観念の行程を示すことにより、イデオロギー化した観念に人間が従属する観念⇒経験の行程を強調する意図があったと解釈した。しかし、完全に一方向的というわけではないが本稿ではこの点に関するより詳細な分析は保留する。

¹⁶ Cf. *You Shall Be As Gods*, p.17-18 (『自由であるということ』23-24頁)

¹⁷ *You Shall Be As Gods*, p.18 (『自由であるということ』24頁)

¹⁸ 序説が終わった直後の方向付けを明確にする第二章においてこの点が強調されることからして、フロムの観念論における reality は無視できないのであると解釈できる。

¹⁹ *You Shall Be As Gods*, p.19 (『自由であるということ』25頁)

²⁰ *You Shall Be As Gods*, p.18 (『自由であるということ』25頁) ここでは最高の価値 (the highest value) となっているが、前後の文脈から至高の価値 (the supreme value) がより確信を突いた表現であると判断した。そのため、これ以降は至高の価値を使用する。

的体験の表現であれば、言葉もまた精神的な経験に関連する事象を指している。この意味において、観念も言葉も人間経験に関連した事象における精神的側面を表現したものであると言える²¹。つまりフロムは、観念と言葉を厳密に分けてはおらず、観念は言葉や比喻、そして概念をも含んでいると解釈する。「神」という言葉も精神的な人間経験を表現したものであるという意味において、神観念とほぼ同一の機能と役割を果たしている。

そして、観念自体に実在 (reality) がいないということは至極当然のことであるが、フロムの時代には観念とは何らかの実在 (reality) を指すものとして認識されていた。近代以前においては、観念は実在 (reality) と同一であったのである。つまり、ヒューマニズムにおける至高の価値 (以下「至高の価値」) を詩的に表現したものが「神」であるというのではなく、至高の価値そのものを「神」と呼んでいたのである。上記の引用は、そのような素朴存在論的観念と一線を画することが述べられている。

また、詩的に表現したものが「神」であるなら、至高の価値を詩的に表さない場合はどのような表現になるのか。

徹底したヒューマニズムは、人間の目標を独立においてみる。それは、虚構や幻想をつき破って十分な現実認識に到達することを意味する。さらにそれは、暴力行使を疑問視する。というのは、人間の歴史を通じて暴力こそ、恐怖を生み、現実の代りに虚構を、真理の代りに幻想を人に信じこませるものとして働きつづけてきたからである。人間の独立をはばみ、人間の理性と感情をゆがめたのもまたこの暴力であった²²。

自然の奴隷である人間が人間性を十分に発達させることによって自由となる²³。

ここで言われているのは、自由となることが人間の目標であり、そして目標を達成するためには人間性を発達させることが必要ということである。自由となることは、ヒューマニズムにおける最高の目標であり、そして最高峰の指標であると言える。言い換えれば、自由であることは至高の価値である。そのため、至高の価値とはあらゆる束縛や権力から解放されること、つまり〈自由であるということ〉を指していると考えられる。

(2) 実在性 (reality)

以上の考察から、至高の価値という実在性 (reality) に関する事象を概念的に表現すると〈自由であるということ〉になり、詩的に表現すると「神」という言葉になると言える。では、至高の価値とは何であり、至高の価値と実在性 (reality) は一元のものであり得るのか。両者に繋がりを求めるとすれば、至高の価値を人間の働きによって現実化する人間経験においてである。これにより、至高の価値はただの指標ではなくなり、人間の実存と結合する実在性 (reality) を持った価値になる。

フロムは明確に生きた観念とイデオロギー化した観念とを分け、その相違は実在性 (reality) を伴った観念であるかどうかで判断している。では、神観念における実在性 (reality) とは具体的に何を指しているのか。至高の価値とはあらゆる権力や束縛から人間を解放するものであり、人類全てに人間性があることを認める普遍主義的な価値観である²⁴。しかし、至高の価値が具体化されず、具体的な形式を取らない

²¹ Cf. *You Shall Be As Gods*, p.17 (『自由であるということ』23頁)

²² *You Shall Be As Gods*, p.13-14 (『自由であるということ』19-20頁)

²³ *You Shall Be As Gods*, p.70 (『自由であるということ』94頁)

²⁴ *You Shall Be As Gods*, p.13-14 (『自由であるということ』19頁)

のであれば「現実的具体的人間の歴史」²⁵を生きている人間にとって何の意味もないものへと化してしまう。

例えば、人命は尊いというのは人類に普遍的に存在する価値観であるが、これを現実化した場合、人道支援などの具体的な活動となる。これは価値を人間の働きによって現実化するものである。価値と行動（人間経験）が完全に同一になることはなく、具体化することで両者に齟齬が生じる。しかし、どのように素晴らしい価値であったとしても、多くの人員に行き渡らせ現実化していくためには、価値を相対化していくことが必要となる。齟齬が次第に広がり、行動が体系化し様式化が進み、具体的な目標が立てられ、目標を達成するために様々な手段が考案される。本来の価値と結合していれば問題ないが、本来の価値を見失い、ただ手段を忠実に行うことを目標とすれば、それは既に現実化すべき価値から疎外されていることになる。目標と手段の逆転である。このように本来の価値から疎外された観念を、フロムはイデオロギーと呼んでいる²⁶。

つまり、神は至高の価値を指しているが、具体的に実行し実現していくためには至高の価値の相対化が必要となる。これはユダヤ教の伝統的な考えと矛盾していない。ユダヤ教の伝統的解釈において、神を知るということは人間が認識論的に神を知るということを意味しない。そうではなく、神の行為を具体的に模倣し行っていくことを意味する²⁷。本来、人間経験の基礎には実現すべき価値があり、行為と価値の実現に矛盾がないことが前提としてある²⁸。であるが故に、至高の価値も相対化され、人間経験として実現可能とするために具体化される。ユダヤ教においては律法や教義、そして礼拝の儀式という形となって示される。

(3) 至高の価値

至高の価値が儀式として具体化された事例として、以下が挙げられる。

別のタルムードに出所をもつことばも同じ精神をあらわしている。「(エジプト人が紅海で死んだ) そのとき、聖にして聖なる御方に仕える天使たちは、みまえに(賛美の)うたを歌おうとした。けれども神は天使たちを責めて言いたもう、わたしの造りしところのもの(エジプト人)は海に溺れつつある。お前たちはそれでも私の前で歌うのかと」(サンヒドリン篇第39のb)²⁹

この箇所には注が付いている。

この伝承から一つの儀式が発展し、それが今日まで続いているのは興味深い。各聖日に礼拝にはその一部として喜ばしきハレルヤの詩篇が数多く読誦される。エジプト人が溺れたと伝えられる、過ぎ越しの祭の第七日目には、ハレルヤ詩篇は半分だけ読誦されるが、これは、神の被造物が亡んだときに喜んだ天使たちを非難した神の精神にのっとったものである³⁰。

²⁵ *You Shall Be As Gods*, p.18 (『自由であるということ』24頁)

²⁶ Cf. *You Shall Be As Gods*, p.18 (『自由であるということ』24頁)

²⁷ Cf. *You Shall Be As Gods*, p.64 (『自由であるということ』90頁)

²⁸ 以下の引用は観念の基礎には経験があるという共通の前提が存在することを暗示する。「そして、およそ観念を用いるものは誰でも、その底にある経験という土台について語っているのだという虚構が作り上げられる。」*You Shall Be As Gods*, p.18 (『自由であるということ』24頁)

²⁹ *You Shall Be As Gods*, p.84-85 (『自由であるということ』114-115頁)

³⁰ *You Shall Be As Gods*, p.85 (『自由であるということ』114-115頁)

これは、エジプト人もまた神の被造物であり、神は自らの被造物であるエジプト人が海に溺れ死んだことを嘆くというタルムードの話である。ここで重要となるのが、神がユダヤ人ではなくエジプト人の死を悼んだという箇所である。

この物語は、ユダヤ人のみならず全人類に人間性を認めることを意味する。それは、ユダヤ民族主義という束縛からの解放を意味しており、〈自由であるということ〉と通ずる精神である。儀式が本来の精神と結び付いている限り、倫理的思想の発展を助長することが可能である。ただし、形式的に第7日目だけ朗誦を半分にするようになれば、倫理は形骸化し、それ以上の発展は望めない。

つまり、至高の価値を現実化していくことは、人間の倫理的な思想の発達を助長する。しかし、至高の価値よりも、体系化された律法や教義、そして礼拝の儀式を順守することにばかりに重きが置かれるようになると、至高の価値は形骸化し、単なる「人間の知的な工作物」³¹となり、人間は至高の価値代わりに人間が作り上げたイデオロギーに従属する。

フロムはこれを「神を選ぶか偶像を選ぶかという問題」³²であると述べる。

観念の疎外過程は例外ではなく通常のことであるが、疎外が起ると、経験を表わす観念 (idea) は一つのイデオロギーに変化してしまい、生きている人間の中にある現実的 (reality) 基盤に取って代るにいたる³³。

疎外された観念とは、人間の行為から本来の価値が失われていることを指している。価値の相対化の過程において、価値と人間の行為の間に齟齬が生じることは通常のことであるとフロムは述べる。疎外の観念に実在性 (reality) がないのは、既に現実化すべき価値を欠如しているため、価値は人間の実存と関係しない。価値が欠如していれば、価値の現実化を目標とし達成する必要性が生じず、ただ行動様式に従属しさえすれば、それはあたかも本来の価値を現実化しているかのように振る舞える。しかし、それは単に人間が作り上げた人工物に従属しているだけであり、価値を欠いた行動様式の奴隷となる。

イデオロギー化した観念に従属する人間は、本来の価値を実現化するために思考する能力を行使することはない。また、価値を欠いた行動様式に従属するということは、自らの実存を放棄することを意味する。なぜなら、自らの意志と責任において行動することを放棄することに等しいからである。

以上のことから〈自由であるということ〉は、本来の価値を疎外することなく実現し、自らの実存を放棄せずに自らの力で負う能力を行使する人間経験と関連していると言える。フロムが言うところの偶像という人間が作り上げた行動規定、つまり中身のない形骸化した形式に従属することではないのである。

3. 独立 (independence)

これまでの議論から、実存を確立するということは、本来の価値を疎外せずに現実化していく能力を行使することと関連しているということがわかった。しかし、フロムの述べる完全な意味での自由を実現することが困難な理由は、人間存在そのものにあると言える。フロムの人間観からその理由を述べていく³⁴。

³¹ *You Shall Be As Gods*, p.18 (『自由であるということ』24頁)

³² *You Shall Be As Gods*, p.76 (『自由であるということ』102頁)

³³ *You Shall Be As Gods*, p.18 (『自由であるということ』24頁)

³⁴ フロムの議論において目標や到達点が中心的に述べられるのに対し、目標への具体的な過程はほとんど論じられない。原因としては、フロムの議論の中心が観念にあるためであることもあるが、フロムの議論において最も補足すべき点でもありと言える。

(1) 人間存在

人間が神のかたちに創造されたという旧約の物語において、アダムとエバは善悪の知恵の木から実を取って食べ、人間がただ死ぬ運命にあることだけが、人間と神を隔てていることが語られる。神は人間が神になることを阻むため楽園から追放したが、人間は神のようになれ、また神を真似ることができる存在になった。神を真似るといのは、神の行為を真似るという事であり、それは律法を实践することによってのみ可能となる³⁵。

人間の創造物語におけるフロムの解釈の中心は、神のかたちに造られた人間だけが、神の行為を真似ることができることにある。神を真似ることは律法を实践することである。律法の中心は、愛と正義を表現し、かつ実現させるための行動規則から成り立っている。抽象的な原理は何百という特殊な法則に具体化され、これらの具体化された法則を实践することにより、神を模倣し、神を知ることができる³⁶。しかし、具体化された法則を行なう事のみが重視され、本来結びついているべき愛と正義から疎外されると、それはただ機械的な行為となる。この意味において、愛と正義は、至高の価値と同様の役割を果たしていると言える。

また、フロムは人間が未発達な存在であるとも述べている。

ハシド派のある教師は「神は人間を造ったあとでは、それをよしとは言っていない。つまり、家畜やその他すべてのものは、造られたままで完成したが、人間だけは未完成だったということである」と述べる³⁷。

ここにおいて、人間は発達途上にあるといえる。では、人間はどのように発達していくべきなのか。

人間の発達の目標は自由と独立である。独立とは、へその緒を断ち切り、自己の実存 (existence) を自己だけの責任として負うという能力を言う³⁸。

ここでは、あらゆる束縛と権力からの解放を概念的に述べた語が自由であり、人間が自由を実現するための能力を独立であると解釈できる。独立とは、自己の実存を自己だけの責任として負うという能力であるというが、己の誕生に対してまで自ら責任を持つことを意味するのか。しかし、フロムの議論は、神か偶像かを選択することが可能な範囲の人間を対象としている。つまり、意識の未発達な状態の人間については視野にいれるべきではない。

大人であったとしても、人間は未発達な存在であると言える³⁹。それは、完全なる自由に到達する可能性を内包した存在である一方、不完全で不確かな存在であるとも言える。人間は、病気や老いや死の恐怖によって脅かされており、それを完全に防ぐことはできない。あらゆる手段を用い日常性を確保し、如何なる事態にも対処できるよう法則を体系化し、脅かしから逃れようとするが、人間が永久に日常性を保つことは不可能である。代わりに人間が従属できる絶対的なものを求めるが、より確かなものを求めようとするほど、有形の偶像、すなわち相対化された行動様式や規則、ユダヤ教的に言えば律法や教義に従属することを欲するようになる。ここにおいて、無形の神すなわち至高の価値は疎外される。

³⁵ Cf. *You Shall Be As Gods*, p.63-67 (『自由であるということ』85-91頁)

³⁶ Cf. *You Shall Be As Gods*, p.67 (『自由であるということ』90頁)

³⁷ *You Shall Be As Gods*, p.70 (『自由であるということ』94頁)

³⁸ *You Shall Be As Gods*, p.75-76 (『自由であるということ』101-102頁)

³⁹ *You Shall Be As Gods*, p.76 (『自由であるということ』102頁)

(2) 従属

人間は実存の不確かさ故に、具体化された形あるものを希求する。この例として、フロムは出エジプト記の物語における、偶像に従属することを求めるヘブライ人の行いを挙げている。

ヘブライ人はエジプトでの隷属状態から解放された後、目の前に広がる自由に耐え切れず、モーセに「何故、われわれをエジプトから出したのか」と不平不満を言い続けた。更には、モーセという目に見える指導者が姿を現さなくなると不安になり、金の牛像を作り神として崇めた⁴⁰。何故、ヘブライ人はこのような行動をしたのであろうか。

この物語からは、人間が具体的に目に見える形で示されるものを絶対的なものとして求める傾向が読み取れる。「名前のない神、眼に見えるかたちでは表現されない神」⁴¹に従属することでは確かさを得られず、より確かな偶像を求めたと解釈できる。人間にとって何よりも重要なのは眼に見えるかたちであると言える。これは、人間が本来の価値を見失い、体系化された行動様式に容易に従属してしまうことと矛盾していない。

奴隷の大群は、強力な指導者によって自由へとせき立てられ、何度も、奇跡や食物や飲物などで安心させられても、やはり、眼に見えるシンボルに跪拝せずにはいられないのである⁴²。

自由を得たはずのヘブライ人が隷属状態に戻ろうとする行動を、フロムはこのように再解釈する。人間にとって何よりも重要なのは眼に見えるかたちであると言えるのか、それとも目には見えない価値であるのか。

無論、人間にとって重要なのは眼には見えない価値の方であろう。しかし、本来の価値を疎外しないためには人間は思考し続けることが必要となる。偶像に対してであれば、自己の実存を投げ出し、思考することを放棄したとしても何ら問題はない。形骸化した行動規定に身を委ね、機械的に行うことだけに神経を尖らせればいいのであるから。これがフロムの意味する偶像に従属するということである。

反対に眼に見えない価値に結びつく為には、思考し続けることが必要となる。具体的に言えば、疎外が生じているか否かを判断し議論を繰り返す根気、積み上げてきた行動規定に改善点を見つけ実践していくだけの努力などである。そこには、既存のかたちを打破するだけのエネルギーが求められる。

(3) 解放

フロムは完全なる自由への具体的な過程を示してはいない。完全なる自由に到達することを目標としつつも、そこにたどり着くまでの具体的な道りがなければ、フロムの自由は実在性 (reality) のない空虚な概念になってしまう。では、具体的な自由へと到達する過程とはどのようなものであるか。

価値がすでに失われているのであれば、既存のかたちを一旦破壊することを必要とする。仮に、眼に見えるかたちのみに従属していたとすれば、抛り所としていた絶対性を失うことを意味する。そのため、〈自由であるということ〉を実現する過程において、多くの反発が生じ、自由を放棄することが求められるようになる。

ヘブライ人もまたモーセに怒りをぶつけ、

⁴⁰ Cf. *You Shall Be As Gods*, p.108-115 (『自由であるということ』145-154頁)

⁴¹ *You Shall Be As Gods*, p.111 (『自由であるということ』148頁)

⁴² *You Shall Be As Gods*, p.111 (『自由であるということ』149頁)

あなたがたは、我々をこの荒野に導き出して、全会衆を餓死させようとしている⁴³。

あなたは何故私たちをエジプトから導き出して、私たちを、子どもや家畜と一緒に、渴きによって、死なせようとするのですか⁴⁴。

と、エジプトで奴隷として留まることを望む声を上げ続けた。これは、〈自由であるということ〉を実現することに恐怖し、自由を拒否する人間の叫びであると解釈できる。確かに、奴隷としての生活には安定があるのに対し、解放後は生活の全てが不安定となったために、エジプトでの生活を懐かしんでいるとも言える。しかし、よりフロムの議論に近づこうとすれば、〈自由であるということ〉を実現する過程において生じる反エネルギーと同次元のものであると解釈できる。

この段階に入れば、お互いがお互いを訴え、まともな議論を行うことが可能な者が極端に少なくなる事態が生じ争いへと発展する。ここで必要となるのが、「人間はおのおの、自分のうちに人間性を含んでいるというヒューマニズムの中心的確信」⁴⁵（傍点は論者による）ではなかろうか。人が神のかたちにつくられたという考えは、全人類に人間性を認めるという段階にまで達する。そしてそれは、議論する相手の実存を認め、その魂の叫びに声を傾けることであると言える。そうして初めて、自らの訴えが形骸化したものであるか、もしくは本来の価値に対外的外れではないかということを議論できるのである。これによって自らの議論を相対化することが可能となる。つまり、人間が解放されるためには、自らの実存を確立すると同時に相手の実存も認めて対話に臨む姿勢が求められる。

4. 結び

エーリッヒ・フロムの自由という概念が、現代社会の問題を抉り出し、且つ、現代に生きる人間の実存の問題に迫るという可能性を指摘してきた。本稿で取り上げたのは、フロムの思想の根幹にあるユダヤ教的思想の基礎である旧約の物語からの自由の解釈である。フロムは学術的には新フロイト派に属しながら、宗教的事象が人間の実存に与える事柄に対しては一定の評価を与えている。フロム自身は、自らの立場を「非有神論的神秘主義」⁴⁶であると語っているが、有神論者でも唯物論者でもなく、自らの立場を考えあぐねているかのようなのである。精神分析家としてのフロムの宗教に対する独自の立場から、人間の実存と宗教事象に関する新たな見解を提示することが可能であると考えた。

残された課題は多い。まず、ユダヤ系思想家の中でのフロムの立場が明確になっておらず、フロムの自由の議論に対する批判が脆弱であり、議論の欠点の補完が不足がちであった。また、旧約聖書とフロムの旧約理解の繋がりが明確になっていない。

しかし、フロム思想の宗教的側面に注目し、フロムの自由の議論を解釈していくことに実存論的意義があることを明らかにした。そのため、フロムの議論を現代社会において解釈することは意味があることであると言える。

現代社会において、対話を通じて異なる価値観も受け入れなければならず、場合によっては他者の価値観を理解するには知識も身につけなくてはならない。自己を絶対化することは許されず、常に相対化することが求められる。それよりは、対話を放棄し、自己を絶対化し、体系化されただけの行動規定に縛

⁴³ 出エジプト16：3。訳は以下 *You Shall Be As Gods*, p.109 (『自由であるということ』146頁) による。

⁴⁴ 出エジプト17：3。訳は以下 *You Shall Be As Gods*, p.109 (『自由であるということ』147頁) による。

⁴⁵ *You Shall Be As Gods*, p.81 (『自由であるということ』109-110頁)

⁴⁶ *You Shall Be As Gods*, p.19 (『自由であるということ』25頁)

られ、他者と同じことをオウム返しのように繰り返している方が容易である。人間はどうもこちらに流れやすい。しかし、それに対し警鐘を鳴らしているフロムの議論は無視されるべきではない。